

# 2015年農林業センサス発表

## ～個人経営が減少、法人化・経営規模の拡大が鮮明に

11月27日、農林水産省は今年の農林業センサスを発表した。農林業経営体数は2月1日現在で1,401,566経営体となり5年前と比較して18.8%も減少した。このうち農業経営体数は1,374,576経営体、林業経営体数は86,712経営体となり5年前と比較して18.1%、38.1%減少し林業における減少が目立つ（表参照）

一方で、農業経営体のうち、家族経営体数は1,341,620経営体となり5年前に比べて18.6%得減少したものの冒頭に述べた通り組織経営体数は32,956経営体で6.3%増加した（表参照）。特に農業経営体のうち法人経営数は27,135経営体で5年前に比べて25.5%増加、そのうち特に組織経営体の法人経営数は22,806経営体で5年前に比べて36.6%増加した。この結果、組織経営体に占める法人経営の割合は69.2%となった。会社法人数は16,485経営体、農事組合法人数は6,335経営体となり5年前と比べてそれぞれ27.0%、54.6%も増加した。

経営耕作面積にも変化がある。耕作地面積規模別に経営体数をみた場合、5年前に比べて北海道では100ha以下の経営体は減少しているものの100haに近づくにつれてその減少幅は少なくなり100ha以上の経営体は27.1%増加、都府県では5ha以下の小規模経営体は減少しているものの5ha以上の経営体で増加しており法人化や経営規模の拡大がこの5年間で鮮明となった。この耕作面積の増大は主に借地耕作割合が増大しており個人経営体が廃業または規模縮小していくなかで大型農家や法人組織体が借り受けて耕作している姿が数値でも確認できた。

販売農家の比率にも変化が見える。専業別に見ると専業農家数は5年前に比べて1万2千戸（2.6%）の減少に留まるが第1種兼業農家は166,046戸で5万9千戸も減少（26.1%減）、第2種兼業農家は720,852戸で23万4千戸も減少（24.5%減）となっている。

気になるのは販売農家の農業就業人口と平均年齢だ。農業就業人口は2,090,014人で5年前と比べて51万6千人（19.8%）減少した。また、平均年齢は66.3歳となり65歳以上が占める割合は63.5%とった。サラリーマンで言えば退職して且つ65歳まで働いてもなお現役バリバリで労働する数が6割以上いる業種となっておりとてもただ事では済まない数字となっている。耕作放棄地面積は424,090ha

（次ページへ続く）

表2 農業経営体数（全国）

| 区分        | 農業経営体  |      | 家族経営体  |        | 組織経営体 |      |
|-----------|--------|------|--------|--------|-------|------|
|           | 法人経営   | 個人経営 | 法人経営   | 個人経営   | 法人経営  | 個人経営 |
| 平成17年     | 2,009  | 19   | 1,981  | 5      | 28    | 14   |
| 22        | 1,679  | 22   | 1,648  | 5      | 31    | 17   |
| 27        | 1,375  | 27   | 1,342  | 4      | 33    | 23   |
| 増減率(%)    |        |      |        |        |       |      |
| 平成22年/17年 | △ 16.4 | 13.0 | △ 16.8 | △ 13.5 | 10.4  | 23.1 |
| 平成27年/22年 | △ 18.1 | 25.5 | △ 18.6 | △ 5.0  | 6.3   | 33.6 |

注：法人経営には、農産物の生産・販売等を行う法人の他に、農作業受託のみを行う法人が含まれる（以下、同じ。）。

表1 農林業経営体数（全国）

| 区分        | 農林業経営体 |        |        |
|-----------|--------|--------|--------|
|           | 農林業経営体 | 農業経営体  | 林業経営体  |
| 平成17年     | 2,085  | 2,009  | 200    |
| 22        | 1,727  | 1,679  | 140    |
| 27        | 1,402  | 1,375  | 87     |
| 増減率(%)    |        |        |        |
| 平成22年/17年 | △ 17.2 | △ 16.4 | △ 30.0 |
| 平成27年/22年 | △ 18.8 | △ 18.1 | △ 38.1 |

注：農業経営と林業経営を合わせて営んでいる経営体があるため、農業経営体数と林業経営体数の合計と農林業経営体数は一致しない。

(前ページより続く)

となっており農地中間管理機構が発足し農家の法人化・大規模化にベクトルが向くように動き始めたところであり今後の成果が期待される所だ。

総括すると国内兼業農家数は減少し、戦後より農地解放以後受け継いできた兼業農家の営農が高齢化と儲からないことで減少している、一方、法人化の増大と共に一戸当たりの耕作面積は着実に増加しており、農業の構造変化が一層進んでいる事が明らかとなっている。

## 「北海道の酒米」

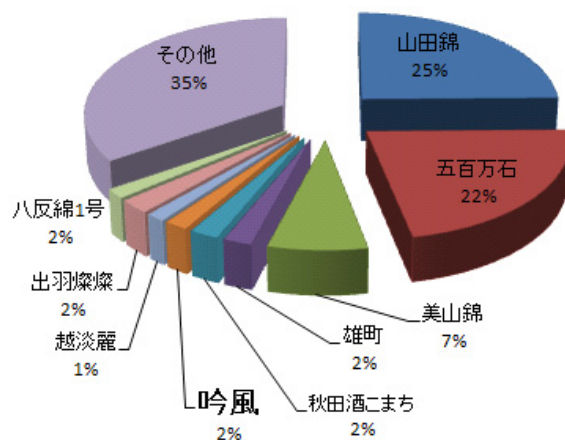
近年評価が高まっている北海道の米であるが、酒米の開発も進んでいる。今回は北海道の酒米事情についてふれてゆきたい。

北海道の酒米の歴史は農林水産省北海道農業試験場で開発され2000年に北海道初の酒造好適米として優良品種となった「初雫」から始まる。同時期に北海道立中央農業試験場において「吟風」が作出され、初雫より心白発現率が高く全国新酒鑑評会で好成績をおさめた。2006年には初雫と吟風の交配種である「彗星」が作出された。昨年2014年には新たな系統で育種された「きたしずく」が酒造好適米となっている。なお、現在は吟風が主要な品種となっている。

全国の醸造用玄米の銘柄別検査割合をみると、山田錦、五百万石、美山錦があわせて半数以上を占めているのに対し北海道品種の吟風は約2%にとどまっている(図1)。

社団法人 北海道米麦改良協会資料によると、北海道内の酒造メーカーによる北海道産酒造好適米の使用量は順調に伸びているが、同時に改善が求められている結果となっている。改善内容は、溶け具合、タンパク質含有率、着色度合、供給安定性、千粒重が挙げられている。このなかで重要な課題としてタンパク質含有量と千粒重の増加について改善目標(吟風:タンパク質含有率6.8%、千粒重24g以上)が提案され改善策が北海道立上川・中央農業試験場から示されている。北海道の冷涼な気象状況が影響を与えるため改善は、施肥管理、栽培管理を合わせて行われている。

まだ、歴史の浅い北海道の酒米であるが、主食用米の成果に追いつき良い結果を残す努力が続けられている。今後の動向に引き続き注目してゆきたい。北海道には13の蔵元があります。この冬は、厳しい気候で醸された北海道の清酒を飲み比べながら鍋をつつくのは如何でしょうか。



## クリオネ通信 “北海道産米スイーツ”

今年で10回を数えるサッポロスイーツコンペティションでお米を使ったスイーツが競われました。グランプリは北海道産米の「おぼろづき」を使ったお米のつぶつぶ感たっぷりのスイーツです。グランプリ以外にも札幌市内20社32店舗で「さっぽろお米なスイーツ」として趣向をこらしたスイーツが販売中です。ご来店の際はぜひご賞味ください。(札幌支店)



「benbeya HPより」

先日、MACのOBの方々と数年ぶりに再会致しました。マックジャーナル創始者の吉部元社長にもお会いし、昔話に花が咲きました。作り始めた頃の事を思い出し、500号達成に向けてよりよい紙面作りに努めようと思いました。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL http://www.mcagri.jp